

童謡・唱歌を用いた生活科の合科的な指導法について

—歌によって植物や動物、人の暮らしを学ぶ—

片山 雅男

キーワード：生活科、合科的な指導、童謡・唱歌、植物、昆虫、労働

はじめに

大学での授業や講習、講演会等でパワーポイントが用いられることが多くなった。これにより、写真や図を多用して視覚的に解説することが可能となり、多くの情報を正確に提供できるようにもなった。その一方で、言葉のみで解説した場合に、聞き手が頭の中で想像して理解することが次第に難しくなっている。植物の巧妙な暮らしぶりの一つとして、その形態と機能の密接な関係を紹介する場合、身近な植物を例にとることが多いが、身近に例がないときには、少しでも親近感を持って内容を理解してもらうために、童謡や唱歌の中に出てくる植物を取り上げることも多い。例えば、サトイモ科の花には、小さな花の集団を引き立たせ、訪花昆虫を誘引するために葉がさまざまな色や形に変化した苞葉が見られる。コンニャクやサトイモもこの仲間で、身近な作物であるが花を見たことのある人は少ない。かつてこのようなとき、中学校で教えられていた夏の思い出の曲が役に立った。この歌は、群馬県と福島県の県境にある尾瀬ヶ原湿原の夏の情景を歌ったもので、その一節に「水芭蕉の花が咲いている、夢見て咲いている水のほとり」と湿原の水際に群生しているミズバショウの白い花（仏炎苞）が歌われている（図1）。かつては多くの人がこの歌を聞くと、水芭蕉の特徴的な白い花を思い浮かべた。

白い花弁だと思っていたものが、苞葉と呼ばれる葉が変形したものだと言明すると、驚きの声があがったものである。近年、この歌は学校で教えられなくなったため、苞葉の説明でこの歌を例に出しても、歌自身になじみがなく、時には歌の解説が必要になってしまうこともある。これは単にその一例にすぎない。初夏の野外観察でウツギの説明をするとき「卵の花の匂う垣根に」として読み込まれた「夏は来ぬ」を例に出しても歌を知らなければ、単なる白い花としか映らない。

一方、一度覚えた歌の歌詞は、歳月がたっ

図1. ミズバショウの仏炎苞（長野県黒姫）



片山：童謡・唱歌を用いた生活科の合科的な指導法について
でも色あせることなく、記憶に残っている。言葉をメロディに載せて覚えることで、その文字情報は確かな記憶として脳に定着する。このため、歌は記憶に残りやすく、幼い頃に何気なく歌っていた童謡がいくつになっても忘れることなく口ずさむことができるのである。

生活科の授業の目的は、子どもたちが人として心身ともに生きていく力を身につけることである。本稿では、童謡・唱歌を教材として生活科の授業にどのように取り入れることができるかを考えたい。

1. 童謡は抒情的な疑似体験

歌の多くはそこに出てくるもののみを学習の対象とするだけではなく、それを取り巻く情景をも併せて記憶に封じ込めている。子どもたちの情緒的な発達を促す上でも歌は重要な役割を果たしている。閉じ込められた記憶の一部が解き放たれると、何もかもが堰を切って脳裏を埋め尽くす。とりわけ生活科の取り扱う内容は、子どもたちを取り巻く多様な事物で構成されており、それがさまざまに組み合わさって子どもたちに影響を与えている。情景や季節感、物事へのイメージとして定着している。その点でも童謡や唱歌・抒情歌は重要な働きをするものと思われる。

幼いころに繰り返して聞いた歌の内容は、たとえその事柄を体験していなくても懐かしく感じるものである。本稿ではこの歌のもつ不思議な力を借りて子どもたちの周りに繰り広げられるさまざまな生活の内容の理解と定着の可能性を探るものである。

2. 生活の内容と童謡・唱歌・抒情歌

童謡・唱歌・抒情歌と呼ばれるものは身の回りの事柄を題材にしたものが多く、子どもたちの生活を扱ったものが多く含まれている。この点で、生活科の9つの内容と密接な関係を持っている歌も多い。先に述べた歌の持っているさまざまな教育的効果を生活科の授業に活用することによって、子どもたちに単なる知識の伝授を行うのではなく、心情的な、情緒的な発達をも促すことが可能になると考えられる。

生活科が設置された背景には、かつての子どもたちが身につけていた事柄が、時代の変化とともに、現代の子どもたちの日常生活から欠落してしまったことにある。本来、子どもたちが経験してきた事柄が経験されなくなったために、さまざまな問題が生じているのである。このため、生活科の内容には、今では行われなくなった、昔の遊びなども含まれている。一方で、音楽科では、時代に合わないとして教えられなくなってしまった童謡や唱歌・抒情歌も多い。かつての日本人の生活の姿を情感豊かに歌った歌を学ぶことと、歴史を学ぶこととはどこに違いがあるのだろうか。歴史の多くは、支配者を中心とした政治・経済を取り上げていることが多い。一方、童謡や唱歌は庶民の暮らしぶりが題材になっていることも多く、その意味することを学ぶことの意義は歴史の学習に勝るとも劣らないものであろう。かつての童謡に歌われた

内容を教材にすることは単なる事物の解説にとどまることなく、子どもたちの情操教育面からも重要であるといえる。

3. 自然を学ぶための童謡の活用

生活の9つの内容の内、自然を取り扱った歌を生活科の教材として考える。生活科の自然を取り扱う上で、季節感を身につけることも重要な課題であり、その点でも有効な働きをするものと思われる。

表 1. 猿蟹合戦の歌詞

3-1. 種子の散布や播種、発芽に関する歌

幼児は4歳児後半から5歳にかけて、身の回りに見られる科学的な事象に興味を示すようになる。身近な動物や植物を観察し始めるのもこのころである。幼児が日常生活の中で植物に興味を抱くきっかけの一つに果物とその種子がある。いろいろな果実を食べているとその中に入っている種子に遭遇する。ウンシュウミカンを食べていた子どもがナツミカンやポンカンを食べたときに真っ先にその中に入っている種子に気付く。ウンシュウミカンではあまり見ないものだからである。種子を手にして「これなあに？」と聞く。「種だよ」と答えると、「食べられるの」と聞き返す。「食べられないけれど、お庭に播いておくと芽が出てきてナツミカンの木になるよ」と答えると、目を輝かせて「播こうか」という声が返ってくる。このようにして幼児の栽培活動が始まる。これをきっかけに、カキやビワ、アンズやモモ、スイカの種子など何でも土に埋められていく。

猿蟹合戦のストーリーもカキの果実の中に見つけた種子を植えた経験があれば、物語の中に円滑に入り込むことが可能である。この民話は地域ごとにさまざまなバリエーションが

1. サルが拾った 柿のタネ
カニが拾った にぎりめし
サルはほしくて 食べたくて
カニをだまして とりかえた
2. サルにもらった 柿のタネ
カニは土ほり 水はこび
芽を出せ葉を出せ 柿のタネ
出さぬとハサミで ちょんぎるぞ
3. やがて実った 柿の木に
サルはするする よじのぼり
見あげるカニに しぶがきを
これでも食べると 投げつけた
4. カニがケガして 泣いてると
蜂、栗、臼が やって来て
サルを懲らせと 怒りだし
きりりとハチマキ たすきがけ
5. クリがとびつく ハチがさす
上からウスが おしつけて
カニがはさみを ふりあげりゃ
とうとうサルも あやまった

あるが、標準的な物語では、蟹が握り飯との交換で猿からもらった柿の種を播いて育てる手順が示されている。(片山雅男・清水義和他、2005)。2番の「芽を出せ葉を出せ 柿のタネ。出さぬとハサミで ちょんぎるぞ」という文句は農村の小正月に見られる成木責(注1)の呪文が採り入れられたものと考えられている。かつて、農村で年の始めに豊作を祈願して行う予祝の行事がモチーフになっている。4、5番では、蜂、栗、臼がずる賢い猿へ報復する情景が描かれている。勧善懲悪を主題にしながらも皆が力を合わせれば、困難なことを克服できる話になっている。

子どもたちの興味は果物の種子からさまざまな植物の種子へと広がりを見せていく。トトロの物語を見た後は、ドングリやクリも種子として認識されて播かれる。どんぐりころころの歌はドングリの種子散布をモチーフにしている。ドングリの仲間の種子は重力散布種子と呼ばれ、成熟後、母樹から落ちて転がって散布される(図2)。ころころは斜面を転がり落ちるさまを見事に表現しているが、原曲にはなかった3番の歌詞は重力散布型種子のもう一つの散布様式を示している。秋にリスはドングリを地面に開けた巣穴に持ち帰り、冬の食べ物として貯蔵する。巣穴に入りきらないドングリは巣の周りに埋められる。秋になると落葉に先駆けてドングリが母樹から落ちる。その後、黄葉が進み、秋の終わりに落葉が起きる。乾燥すると死んでしまうドングリはリスに埋めてもらうか、落ち葉の布団がドングリのの上かけられることで乾燥から保護される。後で作詞された3番の歌詞にはドングリの種子散布の重要な担い手であるリスが登場し、ドングリを乾燥しないように落葉で包んで山に持ち帰る。これは奇しくもこの種子散布のメカニズムが表現されている。保育園、幼稚園で慣れ親しんだ歌の中に植物生態学の知識が織り込まれているのである。(片山雅男・清水義和他、2005)。

初夏にはタンポポの種子が成熟し、冠毛によって風に乗って遠くに運ばれる。この様子は国語の2年生の教科書にもとりあげられている。東京書籍新編新しい国語二上では「たんぽぽ ひらやまかずこ 文・え」として、短い文章の中にタンポポの生態が簡潔に述べられている(小森茂他、2015)。タンポポの綿毛についての種子が風で運ばれる様子が緻密な絵とともに示されていて、子どもたちの印象に残りやすいものとなっている。また、光村図書の国語二上にも「たんぽぽのちえ うえむらとし お文・せとあきら絵」として巧みなタンポポの生活戦略が述べられており、種子が風で遠くに運ばれていくしくみが描かれている(図3)(甲斐睦朗他、2015)。

図2. 重力散布種子

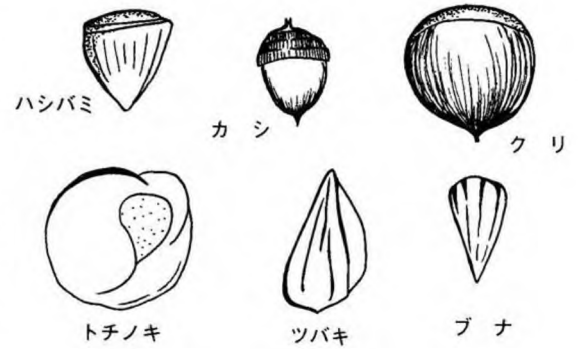


表2. どんぐりころころの歌詞

1. どんぐりころころ どんぶりこ
お池にはまって さあ大変
どじょうが出て来て 今日は
ぼっちゃん一緒に 遊びましょう
2. どんぐりころころ よろこんで
しばらく一緒に 遊んだが
やっぱりお山が 恋しいと
泣いてはどじょうを 困らせた
3. どんぐりころころ 泣いてたら
仲良しこりすが とんできて
落ち葉にくるんで おんぶして
急いでお山に 連れてった

図3. たんぽぽのちえ (光村図書国語二上)



秋にはモミジの仲間の種子が熟す。モミジの仲間の種子は子房壁の一部が伸び出してプロペラ状になる。このプロペラを用いて、種子の落下する力を回転に変え、滞空時間を長くすることでより遠くへの散布が可能になっている。また、アメリカセンダングサやオナモミは動物に付着して運ばれる種子である。これらの散布様式は、子どもたちの手にかかって見事な秋の自然遊びに姿を変えている。

種子散布の様式の中で子どもたちになじみのないものに水散布がある(図4)。クルミやカキツバタ、ココヤシ、マングローブ植物など水辺の植物にみられる様式である。このうち、ココヤシの実実はココナッツと呼ばれ、穴を開けて実の中心にある液状の胚乳をココナッツジュースとして飲んだり、殻の内側の固形胚乳を食べたりすることでは子どもたちもよく知っている。しかしながら、水散布する種子としては知られていない。明治31年に渥美半島の伊良湖岬に滞在した柳田國男が、浜辺に漂着している椰子の実を見つけた。彼はこの実から、南方海洋民族による文化の伝播を考え、帰京した柳田國男から話を聞いた島崎藤村は自らの境遇に照らして童謡「椰子の実」を詠んだ。椰子の実は30cmほどの楕円形で、その外側は厚く丈夫な繊維でできている。空気を多く含むため、海水によく浮かび、海流に運ばれて遠距離への種子散布が可能である。詠まれた実は生育地である南方の島々から月日をかけて伊良湖岬まで流れ着いたものであり、われわれ日本人の祖先が日本列島に住みついた過程を連想させる曲でもある。

情感豊かな曲ではあるが、残念ながら日本に漂着する頃にはココヤシの実はすでに枯死していることが多い。また、ココヤシの木は生涯分枝せず、単軸型の樹形を持つため、歌中にあるような枝は存在せず、また密生することはないので生い茂ることもない。

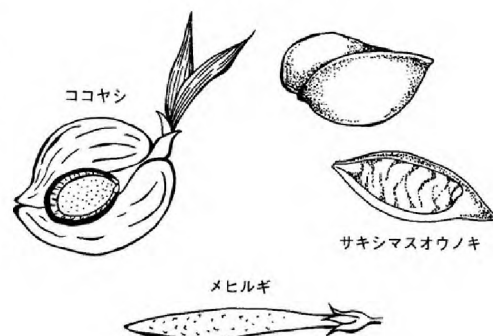
3-2. 昆虫に関する歌

自然の内容の中で、子どもたちの関心の高いものに昆虫がある。昆虫を題材とした歌で、誰もがよく知っているものは赤とんぼの歌である。

表3. 椰子の実の歌詞

1. 名も知らぬ 遠き島より
流れ寄る 椰子の実一つ
故郷の岸を 離れて
汝はそも 波に幾月
 2. 旧の木は 生いや茂れる
枝はなお 影をやなせる
われもまた 渚を枕
孤身の 浮寝の旅ぞ
 3. 実をとって 胸にあつれば
新なり 流離の憂
海の日 沈むを見れば
激り落つ 異郷の涙
- 思いやる 八重の汐々
いずれの日にか 国に帰らん

図4. 水散布種子



1 番の冒頭部分、夕焼け小焼の赤とんぼは、夕焼けに染まった秋の空に赤とんぼが群れを成して飛んでいる情景を歌ったもので、2 番の歌詞の内容から、この赤とんぼはイネの水田耕作に適応したアキアカネだと推測される。春、水の抜かれていた水田に生みつけられた卵が、水田に水が張られることで孵化する。その後、稲田の水中でヤゴとして暮らしたのち、6 月には育ったイネの茎に捕まって羽化し成虫となる。しばらくの間は生まれ育った水田近くの里山の雑木林で小さな昆虫を空中で捕まえて過ごしているが、夏になると暑さを避けて高原に移住する。秋の気配とともに群れをなして山から里山へと戻ってくる。この歌は、子守の姐やに負ぶわれて過ごす幼子が赤とんぼを見ていることから里山の秋の夕方の情景を歌ったものと考えられる。

明治時代、生糸（絹糸）は日本の輸出産品として重要な位置を占めており、日本各地の農村部ではこぞって養蚕がおこなわれていた。カイコの餌となる桑の葉を大量生産するために、本来は畑にならないような山の斜面を切り開き、桑の木を植林して桑畑が作られた。大面積に植え付けられていたため地図にも桑畑が区分されている。地図記号は仕立てられた桑の木の樹形をもとにデザインされた（図 5）。

カイコの餌には大量の葉の付いた枝を切り取り、枝つきのまま与える。日々の作業を容易にするため、クワの木は、主幹を低く切り詰め、強く刈り込むことで、手の届く高さに勢いのいい徒長枝を伸ばして仕立てられた。

日当たりのいい山の斜面の桑の木には、前年伸びた枝にラズベリーに似た赤黒い桑の実が枝もたわわに実る（図 6）。背中に負ぶわれた幼子が、手の届く所に熟した桑の実を籠に摘んで持ち帰る。甘酸っぱい実はお菓子の乏しかったかつての農村部にあっては子ども達のおやつとして親しまれていた。幼子の口元が紫色に染まっている情景が思い浮かぶ。かつては小学校の教材としても飼育されたカイコは養蚕が衰退するとともに教材から姿を

表 4. 赤とんぼの歌詞

1. 夕焼、小焼の、あかとんぼ、
負われて見たのは、いつの日か。
2. 山の畑の、桑の実を、
小籠に、つんだは、まぼろしか。
3. 十五で、姐やは、嫁にゆき、
お里の、たよりも、たえはてた。
4. タやけ、小やけの、赤とんぼ。
とまっているよ、竿の先。

図 5. 桑畑の地図記号

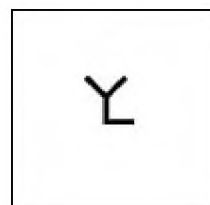
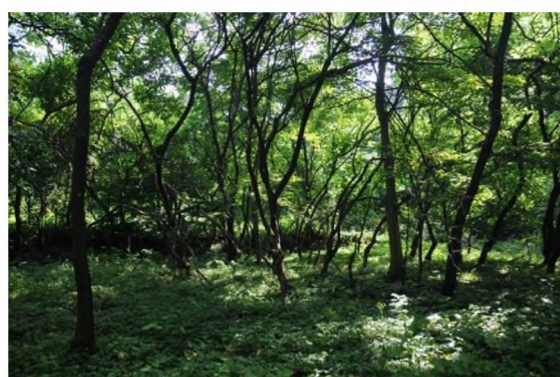


図 6. クワの実



図 7. 放置されたクワ畑（群馬県川場村）



消し、現在の大学生では約三分の一しか名前が答えられない状態である。(片山、2018)。また、農村部にあっては、生産者の高齢化も加わって、養蚕は今ではほとんど見られなくなった。このため、桑畑は果樹園等に切り替えられたり、桑の枝の伸長成長が年に 3mほどと速いこともあって、放置された桑の木は高木林化してしまった所も多い(図7)。2 番の「山の畑のクワの実」は農村部でも見られなくなってしまった。園庭や校庭に桑の木を植えることで、より身近な教材としたいものの1つである

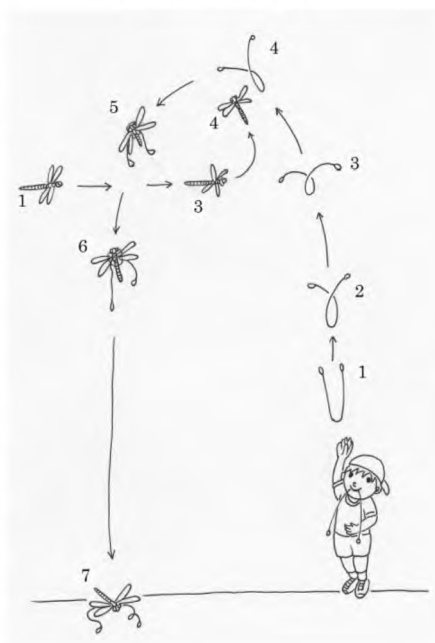
3 番の歌詞では農村部で子守として奉公に出された少女の境遇が歌いこまれている。戦前、子どもの数が多かった時代に、口減らしのために小学校卒業前の女の子が、大きな商家や富裕な農家に子守や女中奉公に出された。同様に男の子は丁稚奉公に出された。子守の必要がなくなったころ女の子の多くは適齢期を迎え、嫁に行った。子守の姐やも数え年の 15 歳で嫁入りしたため、姐やの実家から届いていた手紙も来なくなってしまった。戦後、子どもの数が減少すると口減らしの必要がなくなり、子守の姐やの姿も見られなくなった。

4 番では、姐やがいなくなった自分と、群れから離れ、竹竿に止まっている 1 匹のアキアカネを対比させ、残された幼子の心情を重ね合わせた曲である。郷愁を帯びたメロディーとともに秋の夕暮れの里山の情感は子どもたちの感性をはぐくむ好材料となっている。上記のような歌の背景に触れる事で、この曲は精彩を放つものになりうる。また、生活科の授業の中でこの曲を題材にして、かつての日本人の家族の姿と現在の家族の生活を対比することで、子どもたちに当たり前と思いがちな家族の大切さを理解させることができると思う。

トンボの飛ぶ姿は印象的で、子どもたちもよく観察している。例えば、オニヤンマが水路の上を行き来している姿を子どもたちは熟知していて、トンボ捕りの時には「まーれ、まーれ」と声をかけてオニヤンマが来るのを待っている。これは交尾のためにメスを待っている雄のオニヤンマの縄張り活動である。

また、空中を飛ぶ虫を餌としていることから、これを利用した「トンボ釣り」という捕獲方法が昭和 40 年代頃まで京都市内に伝わっていた。原紙(謄写版印刷の原版に用いる、蠟引きの薄い紙)をマッチ箱の大きさに切り、その中央に長さ 1m ほどの絹糸の一端を置き、その上に直径 4mm ほどの丸い小石を載せる。この糸と小石を原紙で包み込み、涙形によじって止める。もう一方も同じように加工する。夕方、トンボが虫を捕るために群れている所の真下に行き、この絹糸の中央を親指と人差し指でつまみ、上空めがけて投げ上げるのである。両端につけた涙形の原紙の包みが回転しながら上がって来るのを虫と見間違えたトンボが寄ってきて、その間に張られた絹糸に絡まって、地上へと落ちてくる。いずれも、トンボの習性を観察した中から生み出された

図 8. トンボ釣



捕獲法である。

また、保育園や幼稚園で行われるリズム運動にトンボのメガネがある（表5）。子どもたちの大好きなリズム運動であるが、前奏の部分では、両手を水平に伸ばして足を揃え、腰をひねって体を左右に回す。歌の部分になると、トンボになりきった子どもたちが両手を大きく広げて駆けまわる。夕空に飛び交うアカトンボの群れのイメージである。曲の終わりに「とんぼのピ」の掛け声とともに、片足を後ろに上げ、体を上反りにして止まる。竿の先に止まった『とんぼ』の姿を現している。トンボの仲間は昆虫の中では原始的なグループで、その特徴の一つに、翅を重ね合わせる事ができない。竹竿に止まるときも翅の先端を斜め前方に伏せる形で止まっている。

なお、トンボの飛び方を見ていると、空中であたかも静止しているようにみえるときがある。これは他の昆虫の飛翔方法とは違って、前翅と後翅を個別に動かすことができるためであり、飛んでいる虫を捕獲してたべるのに有利な飛び方になっている。

表5. とんぼのめがねの歌詞

1. とんぼの めがねは
水いろ めがね
青いおそらを
とんだから とんだから
2. とんぼの めがねは
ぴかぴか めがね
おてんとさまを
みてたから みてたから
3. とんぼの めがねは
赤いろ めがね
夕焼雲を
とんだから とんだから

4. 人の暮らしぶりに関する歌

生活科の9つの内容の中で、児童の生活圏としての環境に関する3つの内容があり、その一つが「地域と生活」である。これは、自分たちの生活が、地域で生活したり働いたりしている人々やさまざまな場所とかかわっていることを理解することを目指している。ここでは、人びとの暮らしぶりや仕事に対する取り組み方を題材とした童謡・唱歌について学ぶことを考える。

4.1 村の鍛冶屋

鉄などを加工する職人を鍛冶もしくは鍛冶屋と呼んだ。加工品が刀剣である場合には刀鍛冶もしくは刀工（小鍛冶）と称したが、一方、包丁や農具、漁具、山道具などの生活刃物を製作する鍛冶屋は野鍛冶もしくは農鍛冶と呼ばれた。かつては日本各地の村々に数多くみられた。現在でも地方に行くと伝統的な野鍛冶が活躍している地域がある。「村の鍛冶屋」はこの野鍛冶の仕事ぶりを見事に歌い上げた唱歌である。作詞者・作曲者は明らかではないが、1912年（大正元年）の「尋常小学唱歌（四）」に初めて取り上げられた。その後、時代に合わせて歌

図9. 鍛冶屋（喜多院職人尽絵）



詞が書き換えられながら、そのリズムカルな旋律によって日本各地の小学校で愛唱されてきた。昭和 30 年代になって、農林業が機械化され、大量生産の農具が出回るようになって、需要が激減し、野鍛冶は次第に各地の農村から消えていった。身近に鍛冶屋が見られなくなったとして、昭和 52 年には小学校学習指導要領音楽では共通教材から削除され、以後順次、音楽の教科書から姿を消し、昭和 60 年以降は教科書から完全に消滅した。

野鍛冶はその地域の農家の人びとの注文を受けて農具を作る。使い手は自分にとっての作業のしやすい農具を求めるため、結果としてその土地の土質や耕地の条件、栽培植物の種類や使用目的によって改良が加えられる。鋤を調べてみると、その種類の多様さと土地の名前の付いた鋤の多さに驚かされる。また、同じ種類でも使い手の体形や癖などによって、さまざまな形状のものが作られた。鍛冶屋はかつての農山村の農業にはなくてはならない存在であった。

生活科では自分たちの生活が地域で生活したり働いたりしている人々やさまざまな場所とかかわっていることを理解させることを目指している。この点で、鍛冶屋と村人とのかわり方は現代の生活が見失ってしまった人のかかわり方を教える格好の教材となりうる。また、理科でも物の作り方を学ぶが、モノづくりの根底に流れているのは、このような野鍛冶のモノづくりに取り組む姿勢であろう。その点で、今は見られなくなったからといって教えなくなるのではなく、記録映像などを駆使してでも、その歌の持つ教育的価値を継承しなくてはならない。

1 番では、一時も休むことなく日々の仕事に没頭している情景が描き出されている。野鍛冶の「丈夫で、使い勝手の良い農具になれ」という願いをこめて鉄を鍛錬する槌の音、真っ赤に焼けた鉄を打つ時に出る火花、水打ち作業（注 2）で水が熱湯の玉となって飛び散るさまが臨場感豊かに歌われている。

また、火力を上げるため、絶え間なくふいごを動かして酸素を送り込むさまが描かれている。つづく 2 番では、職人氣質で自分の考えを曲げない野鍛冶を一刻老爺と表現している。早寝、早起きを励行し、そのため病気をしない。また、健康のために、規則正しい生活を身につける

表 6. 村の鍛冶屋の歌詞

1. 暫時も止まらずに槌打つ響
飛び散る火の花 はしる湯玉
ふみごの風さへ息をもつがず
仕事に精出す村の鍛冶屋
2. あるじは名高きいつく老爺
早起き早寝の病知らず
鐵より堅しと誇れる腕に
勝りて堅きは彼が心
3. 刀はうたねど大鎌小鎌
馬鋤に作鋤 鋤よ鉋よ
平和の打ち物休まずうちて
日毎に戦ふ 懶惰の敵と
4. 稼ぐにおひつく貧乏なくて
名物鍛冶屋は日々に繁昌
あたりに類なき仕事のほまれ
槌うつ響にまして高し

図 10. 大鎌、小鎌、鋸鎌（農具便利論）



ことも生活科で子どもたちが学ぶ重要な事項である。重い入れ槌を振り続けることで鍛え上げられた腕の筋肉よりも固い信念をもって仕事に打ち込んでいる気構えが歌われている。3番では、地位が高く見られる刀鍛冶に対して、低く見られる野鍛冶ではあるが、武具ではなく農民が平和に生産活動を行うための農機具を作っていることを誇りとし、怠けることの無いように自分自身を奮い立たせている姿が詠まれている。また、野鍛冶が注文に応じて作るさまざまな農機具が挙げられている。これは、農作業の多様さとその作業に合わせて農機具が作られてきたことを示している。大鎌は牛馬の飼料として草刈り場で草を刈ったり、作物を収穫するために用いられる大きな鎌で、長い柄に持ち手をつけて振り回しやすくしたものである(図10)。小鎌は草や芝を刈り取るために用いられる。稲刈りや麦刈りには鋸の歯の付いた鋸鎌が使われる。馬鍬は牛や馬に牽かせ、水田の代掻をする農具である(図11)。鍬は土を掘り上げる道具で、水田を荒起しするときや雑草を削り取るときや畝作りをするときなど広範囲な農作業で用いられる。このため、それぞれの用途に応じて作られた。また、土の粘度によって形状を変え、作業がはかどるように改良が加えられた。鋤は櫛の形をしており、地面を掘ったり、土砂をかき寄せたり、雑草の根を切ったりするのにつかわれた。また、鉋は杣師や樵、猟師など、山で働く人々が使う刃物で、枝打ちや木を削る、雑草の刈り払い、動物の解体などで使われる刃の厚い刃物である。

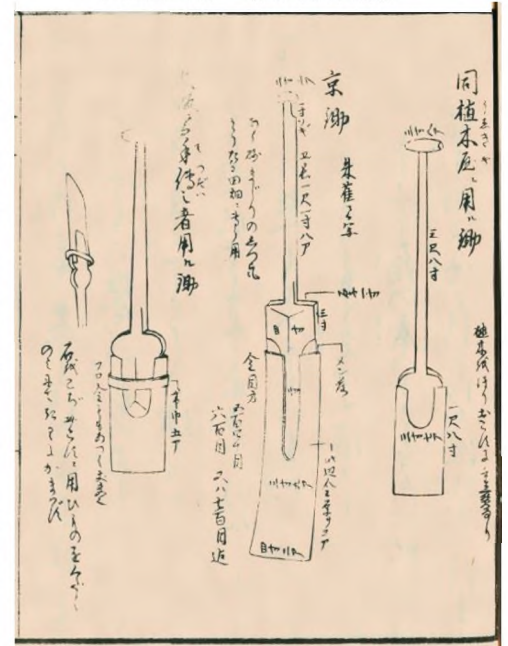
4番は仕事に励めば裕福になり、繁盛する。ひいては、高い評価が得られ、自信につながることを歌われている。これは、まさに、生活科が目指すところの一つになっている。

この歌は戦時下にあつては、平和が歌われた3番、4番は国策に不相当として教科書から削除された。野鍛冶が農民のさまざまな求めに応じて農機具をつくり、その出来栄を誇りに思っていた部分が削られてしまった。また、戦後は文語調が口語調に改められ、難易な言葉が平易な言葉におきかえられてしまった。子どもたちが抵抗感なく文語調の言葉に触れるいい機会でもあるので、元の歌詞を用いた指導が望まれる。

図11. 馬鍬 (農具便利論)



図12. 鋤 (農具便利論)



おわりに

童謡、唱歌、抒情歌には、日本の四季とそこに暮らす人々の生活がやさしいメロディに載せて歌われているものが多い。子どもの頃に聞き、口ずさむことによって、子どもたちはさまざまな知識を得るとともに、日本人としての情感を身につけ、情緒的な発達を遂げて行く。生活科で子どもたちが学ぶ内容は、子どもたちの生活圏に起きているさまざまな事象であり、人とかかわりである。従って、その内容の多くが童謡や唱歌、抒情歌の題材となっている。植物や動物に関するものも、それらの住处や暮らしぶりを観察し、丁寧に描かれているものが多い。幼少期にこれらの歌を習うことによって、それぞれに慣れ親しみが生じ、その後の理科や社会などの理解に役立つことも多い。また、村の鍛冶屋のような今は見ることの少なくなった職業の労働歌であっても、そこに歌われている製品を介した人と人のつながり、いいものを創っているという誇りを持つという点では生活科の教材として優れたものであると思う。これらの歌に多く見られる文語調の難解な言葉、語彙も、その意味を説明すれば、子どもたちの理解は容易であり、その後のさまざまな文学、古典を読み解く素養ともなりうる。また、成人したときにも、メロディを聞けば知らずにその歌詞を口ずさむことも多い。知識を記憶にとどめておくことは難しく、時とともに薄れていくが、歌になっていると記憶に残っていることが多い。これらの点で、童謡、唱歌、抒情歌を用いた合科的な生活科の授業を行うことは意義のあるものと考えられる。

引用・参考文献

- 片山雅男・清水善和他（2002）グリーンセイバー―植物と自然の基礎をまなぶ 研成社 東京
片山雅男・清水善和他（2005）グリーンセイバー・アドバンス 研成社 東京
小森茂他（2015）新編新しい国語2上 東京書籍出版株式会社 東京
甲斐睦朗他（2015）こくご2上たんぽぽ 光村図書出版株式会社 東京
片山雅男（2018）生活科の実践的教材としての昆虫の育ち方カードに関する研究 夙川学院短期大学教育実践研究紀要 第11号

注釈

- 注1 成木責め：斧などで果樹（成り木）を叩いたり、軽く傷つけたり、「成るか成らぬか、成らねば伐るぞ」と脅かして秋の結実を約束させる小正月の予祝儀礼。柿や栗に行うことが多い。
注2 水打ち：鉄の表面の酸化皮膜をはがすために水で濡らした手鎚で、赤く焼けた鉄を細かく叩き、気化爆発を起こさせる。水が一瞬にして湯の玉となって、鉄の表面を走っていく。